

演題名：アレルギー性鼻炎に対する補陰の治療

所属名：いまなか耳鼻咽喉科

演者名：今中政支

要旨：

演者は、本研究において、花粉症（季節性アレルギー性鼻炎）の標治には、麻黄一石膏の組み合わせが最も有効であり、方剤としては五虎湯、小青竜湯エキスの併用（以下、虎龍湯とする）が特に有用であることを強調した。その優れた抗炎症作用と鼻粘膜の浮腫をとる利尿作用は、ステロイド薬に勝るとも劣らないものだったからである。

さらに、その後の経験から、花粉症に適した方剤というものは同一個体でも時期によって異なるのではないかと考えるようになった。その概要は、『まだ雪もチラつ2月の初めは、寒邪の影響が強く、小青竜湯や麻黄附子細辛湯による温肺が適している。やがて花粉飛散量が増える3月になれば、花粉という風邪に加えて、鼻粘膜の炎症による熱邪が盛んになり、小青竜湯単独では効かない割合が増えるため、越婢加朮湯もしくは虎龍湯（五虎湯+小青竜湯）に変更し、清肺熱を図る。そして、気候も温かくなる5月になれば、さらに熱邪が強くなるので、炎症を煽る温肺の方剤は捨てて、五虎湯+辛夷清肺湯などが適しているのではないか』というものである。

一方、2008年「中医臨床」誌に江部洋一郎先生が、「漢方の臨床」誌に灰本元先生が、相次いで「花粉症の主病態を陰虚（陰液不足）」とする論文を発表され、花粉症における陰虚の重要性について述べられた。そこで、演者も陰虚に留意して臨床的な観察をするようになった。すると体質的な陰虚（内因）だけでなく、秋・冬の気候による乾燥とマンションなどの気密化した室内と暖房による乾燥といった環境因子、抗ヒスタミン薬の連用や時に麻黄剤の連用による鼻粘膜の乾燥なども関わっていることに気づかされた。薬物による鼻粘膜の乾燥（局所の陰虚）は、医原性そのものであり、治療者は充分注意する必要がある。事実、4月以降、その抗ヒスタミン薬の内服を中止することで鼻閉が改善する例をしばしば経験する。

そこで、補陰が必要な場合、演者は滋陰降火湯や滋陰降火湯+麦門冬湯、白虎加人参湯、麦門冬湯+辛夷清肺湯などを処方している。その一方で、麻黄一石膏の組み合わせの代表的方剤である虎龍湯は、花粉の熱邪そのものによる傷陰と麻黄の強い利尿作用による傷陰を、生津の石膏が予防している点において、優れているのだとも確信した。

今回、耳鼻咽喉科専門医であり、なおかつ漢方専門医である演者は、アレルギー性鼻炎患者の鼻粘膜の傷陰の病態を探るため、電子ファイバースコープによる鼻粘膜の状態の観察所見と舌診所見との比較、および他の漢方医学的診察法による所見との整合性について調査し、知見を得たので報告する。